

「ふるさとをはるくこゝに紀三井寺、はなのみやこもちかくなるらん」

と奉謝を請けやうと店の前に立ちますと、内から丁稚が盆に載せて幾何かのお錢をくれましたので、夫婦は喜んで禮を述べて立去らうとする時眼についたのが表の暖簾。

「ナア婆さん、同じ家名もあるが、爰の家の名も紺田屋と云ふて商賣も縮緬問屋とは能う似た事も有るもんやな……」

「妾しも先刻から然ふ思ふて居ました。此所で暫く休まして貰ひましょ」

二人は店の隅へ腰を降して店の様子を見廻して居りました。

「コレ常吉」

「ハイ」

「店の隅に腰を降して休むで御座る巡禮のお方に、モシや貴君は京都のお方では御座りませんかと聞きて来し」

「へエ」

丁稚は走つて参りまして、

「貴君方は若しや京都のお方では御座りませんか」

「ハイ、私等二人は京の者で御座ります」

「旦那、あの二人は京の者やと云つてます」

「そうか、もう一度行て、三條室町では御座りませぬかと聞いておいで」

「ハイ、もうし貴君は三條室町では御座りませぬか」

「へエ、能う御存じで御座りますな、私は三條室町で御座ります」

「ア、左様ですか、へエ旦那、三條室町やと云ふて居ります」

「左様か、もう一度いておいで、お名前は、紺田屋忠兵衛さんとは申しませんかと」

「へエ、何度も面道臭い。もしお名前は紺田屋忠兵衛さんとは申しませんか」

「へエ、左様で御座ります」

「なに、アノ紺田屋忠兵衛、待て居れ、もし旦那矢つ張り紺田屋忠兵衛と云ふて居ります。如何しませう」

「左様か宜し、私が行きます」

久七は表へ出て参りまして、

「旦那様御久敷ふ存じます。何時も御機嫌宜敷く御達者で御目出度ふ存じます」

「へエーへエ何誰さんで御座ります。なれく敷ふ仰しやつて下さります、貴君様は」

「へエ御見忘れで御座りましよ、私は御店に御奉公を致して居りました、アノ久七で御座ります」